

第一八章 靈界の情勢 (一八)

ここで自分は、神界幽界の現界にたいする關係を一寸述べておこうと思つ。

神界と幽界とは時間空間を超越して、少しも時間的の觀念はない。それゆえ靈界において目撃したことが、二三日後に現界に現われることもあれば、十年後に現われることもあり、数百年後に現われることもある。また数百年数千年前の太古を見せられることもあり、その見ゆる有様は過去、現在、未来が一度に鏡にかけたごとく見ゆるものであつて、あたかも過去、現在、未来の区別なきが如くにして、しかもその区別がそれと歴然推斷され得るのである。

靈界より觀れば、時空、明暗、上下、大小、広狭等すべて区別なく、皆一樣平列的に靈眼に映じてくる。

ここに自分が述べつつあることは、靈界において見た順序のままに来るとはかぎらない。靈界において一層早く会つた靈魂が、現界では一層晩く会つこともあり、靈界にて一層後に見た靈魂を、現界にて一層早く見ることもある。今回の三千世界の大神劇に際して、檢舞台に立つところの靈界の役者たちの靈肉一致の行動は、自分が靈界において觀たところは、時間において非常に差異がある。

歴然推斷……事理を推測しハッキリと斷定すること。

檢舞台……自分の腕前をあらわす晴れの場所。

されど自分は、一度靈界で目撃したことは、神劇として必ず現界に再現してくることを信ずるものである。

さて天界は、天照大御神の御支配であって、これは後述することにするが、今は地上の神界の紛乱状態を明らかにしたいと思う。今までは地上神界の主宰者たる国常立尊は、「表の神諭」に示されたる如くに、やむを得ざる事情によって、引退され給うていられた。それに代つて、太古において衆望を担つて、国常立尊の後を襲いたまつた神様は、現在には支那という名で区劃されている地域に、発生せられたる身魂であつて、盤古大神という神である。この神はきわめて柔順なる神にましまして、決して悪神ではなかつた。ゆえに衆神より多大の望みを囑されていたまつた神である。今でこそ日本といい、支那といい露西亞といひ、種々に国境が区劃されているが、国常立尊御神政時代は、日本とか外国とかいふような差別は全くなかつた。

ところが天孫降臨以来、国家という形式ができあがり、いわゆる日本国が建てられた。従つて水火沫の凝りてなれるちよう海外の地にも国家が建設されたのである。さて、いわゆる日本国が創建され、諸々の国々が分れ出でたるとき、支那に生まれたまつた盤古大神は、葦原中津国に来たりたまいて国祖の後を襲いたもつた上、八王大神という直属の番頭神を御使いになつて、地の世界の諸国を統轄せしめられた。一方いわゆる外国には、国々の国魂の神および番頭神として、国に八王八頭という神を配置された。丁度それは日本の国

盤古大神……日の大神（伊邪那岐命）の直系で、太陽界から降誕した神人。支那（現在の中国）の北方に降つた温厚無比の正神だが、衆神におされて国祖の後を襲い地上の世界を統括した。

八王大神……本来、盤古大神の子と生まれ、その神政を総理した神だが、常世国（北米）にありて常世彦といふ。邪靈八頭八尾の靈に憑依され、常世姫（稚姫君命の第三女）金毛九尾の白狐が憑依）と結婚し世界を混乱に導いた大邪神となる。

に盤古大神があり、その下に八王大神がおかれてあったようなものである。日本本土における八王大神は、諸外国の八王八頭を統轄し、その上を盤古大神が総攬したまいましたが、八王八頭は決して悪神ではない。天から命ぜられて各国の国魂となつたのは八王であり、八頭は宰相の位置の役である。こういう風なのが、今日、国常立尊御復権までの神界の有り様である。

そうこうするうちに、露国のあたりに天地の邪氣が凝りかたまつて悪靈が発生した。これがすなわち素盞鳴命の言向和された、かの醜い形の八頭八尾の大蛇の姿をしていたのである。この八頭八尾の大蛇の靈が靈を分けて、国々の国魂神および番頭神なる八王八頭の身魂を冒し、次第に神界を悪化させるように努力しながら現在にいたつたのである。しかるに一方印度においては、極陰性の邪氣が凝りかたまつて金毛九尾白面の悪狐が発生した。この靈はおのおのまた靈を分けて、国々の八王八頭の相手方の女の靈にのり憑つた。

しかして、また一つの邪氣が凝り固まつて鬼の姿をして発生したのは、猶太の土地であつた。この邪鬼は、すべての神界並びに現界の組織を打ち毀して、自分が盟主となつて、全世界を妖魅界にしようとする目論みている。しかしながら日本国は特殊なる神国であつて、この三種の悪神の侵害を免れ、地上に儼然として、万古不動に卓立しておることができた。この悪靈の三つ田のはたらきによつて、諸国の国魂の神の統制力はなくなり、地上の世界は憤怒と、憎悪と、嫉妬と、羨望と、争闘などの諸罪惡に充み満ちて、ついに收拾すべからざる

八頭八尾の大蛇……露国辺の天地の邪氣が凝つて発生した悪靈で、八王大神に憑依。また悪神の頭目の陽性の悪靈で、世界の統治者・指導者に憑つて神靈世界や現実世界を悪化しつづける邪靈。三種の邪神の一。

金毛九尾白面の悪狐……印度に発生した極陰性の邪氣が凝つた悪靈。八王八頭の相手方の女の靈にのり憑る。悪の張本人。三種の邪神の一。

邪氣が凝り固まつた鬼……猶太の土地に発生した邪鬼。あらゆる方面の技術に精通した人に憑依して悪事を敢行する悪靈。六面八臂の邪鬼」といふ。三種の邪神の一。

三界の紛乱状態を醸したのである。

ここにおいて、天上にまします至仁至愛の大神は、このままにては神界、現界、幽界も、共に破滅淪亡の外はないと觀察したまい、ふたたび国常立尊をお召出し遊ばされ、神界および現界の建替を委任し給うことになった。そうして、坤之金神をはじめ、金勝要神、竜宮乙姫、日出神が、この大神業を輔佐し奉ることになり、残らずの金神すなわち天狗たちは、おのおの分担任に従って御活動申し上げ、白狐は下郎の役として、それぞれ神務に参加することになった。ここにおいて天津神の嫡流におかせられても、木花咲耶姫命と彦火々出見命は、事態容易ならずと見たまい、国常立尊の神業を御手伝い遊ばすこととなり、正神界の御経綸は着々その歩を進め給いつつあるのである。それと共にそれぞれ縁ある身魂は、すべて地の高天原に集まり、神界の修行に参加し、御経綸の端なりとも奉仕されることになっておるのである。

そもそも太古、葦原瑞穂中津国は大国主命が武力をもつて、天下をお治めになつていた。天孫降臨に先だち、天祖は第三回まで天使をお遣しになり、ついには武力をもつて大国主命の権力を制し給うた。大国主神も力尽きたまい、現界の御政権をば天命のままに天孫に奉還し、大国主御自身は、青芝垣にかくれて御子事代主と共に、幽世を統治したまうことになった。

この時代の天孫の御降臨は、現在の日本なる地上の小区劃を御支配なし給うためではな

坤之金神……国常立尊の妻神として宇宙創造の太初からの輔佐神。豊雲野尊の御退隱後の名称。地藏尊・西王母・瑞の御霊というも身異名。

金勝要神……大地の金神と言い、地球の靈魂にます神霊で、神典では櫛名田姫・須世理姫と称す。肉体の女の名を櫛名田姫(すみこ)という。つまり現界では大本二代教主出口すみのこと。

竜宮の乙姫……現界的にいえば、始めは開祖の長女出口米とされ、後に聖師さまと大本を継がれた出口すみのこととされる。

日出神……聖師さまの隠し名。

木花咲耶姫命……大本三代の出口直日の使命とされた神名。

彦火々出見命……大本三代の補佐神の使命とされる神名。

青芝垣……お墓のこと。

事代主……日本神話で大国主命の子で、出雲国で父をたすけて国政に當つたが、国

く、実に全地球の境界を知食するための御降臨であり給うた。しかしながら未完成なる世界には、憎悪、憤怒、怨恨、嫉妬、争闘等あらゆる邪悪が充満しているために、天の大神様の御大望は完成するにいたらず、従つて弱肉強食の修羅の巷と化し去り地上の境界、現界は、ほとんど全く崩壊淪亡しようとする場合に立ちいたつたのである。

かかる情勢を見給ひし天津神様は、命令を下したまいて、盤古大神は地上一切の幽政の御権利を、良金神国常立尊に、ふたたび御奉還になるのやむなき次第となつた。ここに盤古大神も既に時節のきたれるを知り、従順に大神様の御命令を奉戴遵守したまつた。しかるに八王大神以下の国魂は、邪神のためにその精霊を全く汚されきつていたので、まだまだ改心することができず、いろいろと悪策をめぐらしていたのである。なかには改心の兆の幾分見えた神もあつた。

かくの如くにして国常立尊が、完全に地上の境界を御統一なしたまうべき時節は、既に日に近づいている。境界の有様は現界にうつりきたり、境界平定後は、国常立尊は幽政を総纏したまい、大國主命は日本の幽政をお司りになるはずである。しかし現在ではまだ、八頭八尾の大蛇、金毛九尾の悪狐および鬼の霊は、盤古大神を擁立して、幽界および現界を支配しようと、諸々の悪計をめぐらしつつあるのである。

しかしながら従順な盤古大神は、境界に対するかかる反逆に賛同されないので、邪鬼の霊はみずから頭目となり(赤色旗を押し立てて)、いろいろの身魂をその眷属に使ひつつ、高

譲りの神に対して国土献上を父に勧め、青芝垣を作り退隠したという。

赤色旗……天皇旗のこと。はじめ共産党の赤旗のことと思ひ違ひして、大本教団ではこの部分を削除してしまつたが、出口和明氏が孝明天皇の事績を調査していくうちに、天皇旗の存在に気付き、これこそは國

天原乘取策を講じている。

そこで天よりは事態容易ならずとして、御三体の大神が地上に降臨しまして、国常立尊の御経綸を加勢なしたまうことになり、国常立尊は仮の御息所を蓮華台上に建設して、御三体の大神様を奉迎し給うこととなるのである。

したがって、御三体の大神様の御息所ができたならば、神界の御経綸が一層進んだ証拠だと拝察することができる。

(大正一〇・一〇・二〇 旧九・二〇 谷口正治録)

瑞月

言霊の幸ふ国に生れ来て

祝詞を知らぬ人ぞおほかり

神人を苦しめおける報ひにや

常世の国の鼻息あらし

家権力の象徴として、綾部の本宮山山頂における神殿破壊の様相が判明したのでした。

御三体の大神……天御中主大神・高産靈大神・皇産靈大神の三神のこと。